

支援を組み立てるための基本 I

行動の機能に着目した支援の組み立て

社会福祉法人 正夢の会
パサージュいなぎ
支援ディレクター 堀内 太郎

この時間で学びたいこと

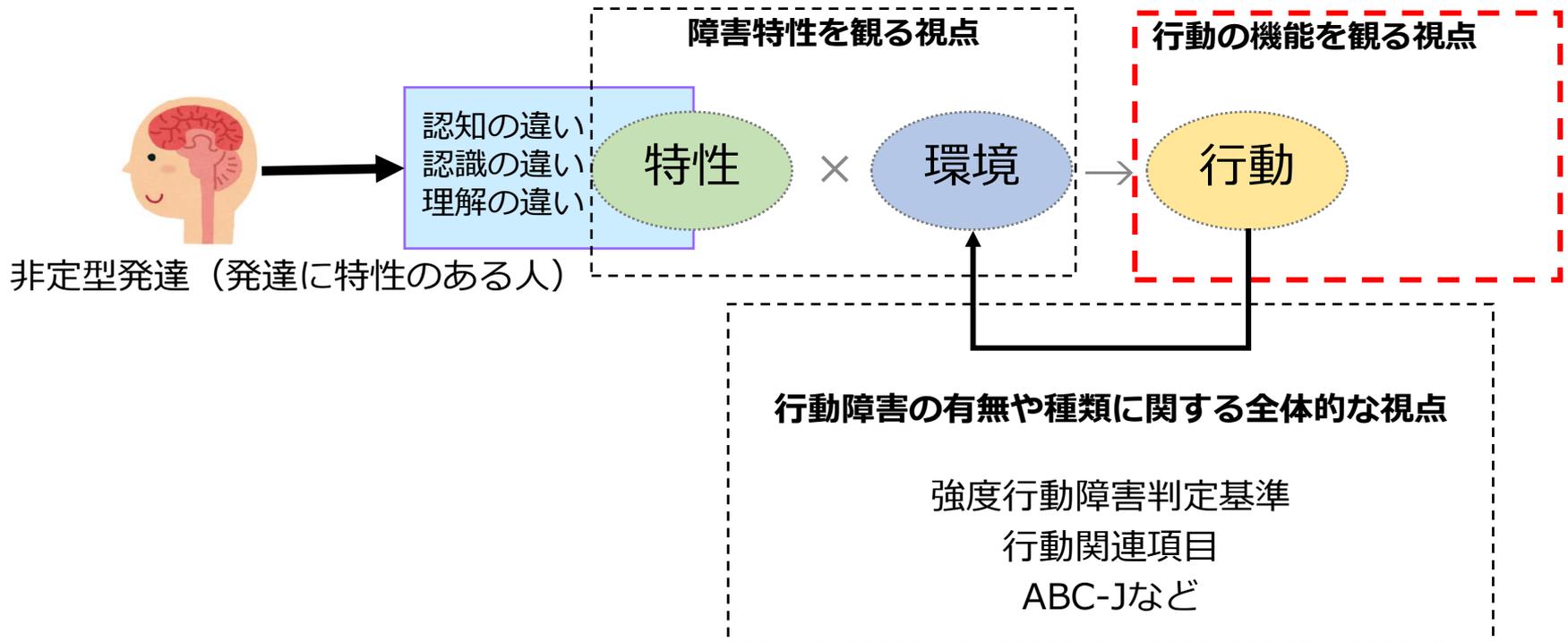
- この時間では、基礎研修で学んだ予防的な支援（特性把握→冰山モデル→構造化）だけでは、行動の改善が難しいケースについての支援の組み立て方を紹介します。
- これまでは、強度行動障害が現れる要因を障害特性と環境の相互作用に注目して支援を組み立てることを学んできました。この講義では、もう一步踏み込んで行動そのものの中にある、行動の機能に注目する考え方を紹介します。
- 内容的には難易度が高い内容であり、実践する前に専門的な研修の受講と日々の記録，アセスメント技術が必要です。当講義の内容は、上記の通り時間と労力を要した上で、事例検討等で活用して初めて効果が出る事を予めご了承ください。

基本は「予防的支援」

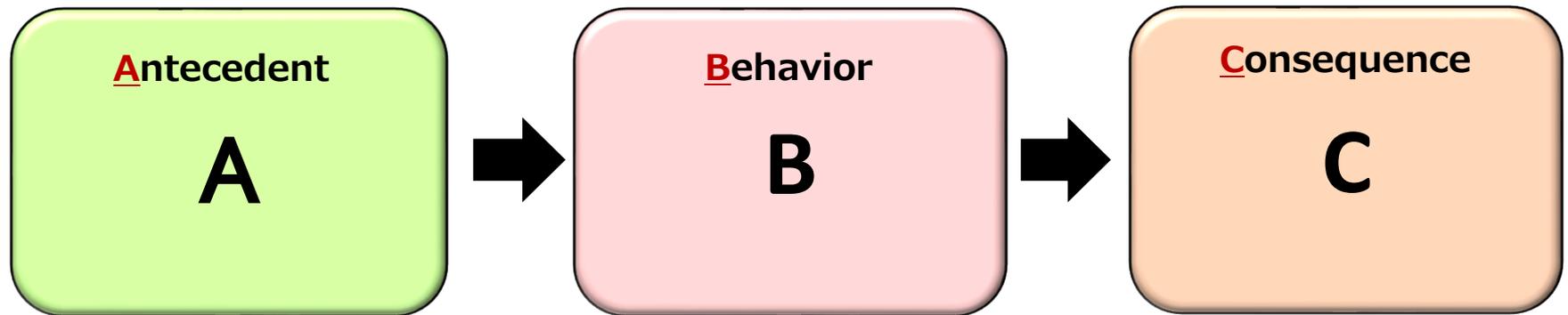
- 強度行動障害に苦しんでいる方の苦手としている事に配慮をし、得意なことは生活の中で活用する事が支援の基本なので、強みと弱みを把握するという意味でも障害特性の把握は必要です。
- 特性を把握し、苦手なことに対する合理的配慮が構造化という事になります。
- これらの基本的な支援は、予防的な支援と考えることができます。
- しかし、予防的な支援だけで、すべての強度行動障害が改善されるわけではありません。

行動の機能を見る視点

行動そのものにどのような機能（メッセージ）が隠されているのかを探る方法が有効な場合もあります。



「ABC」機能分析モデル



先行刺激
(環境・きっかけ)

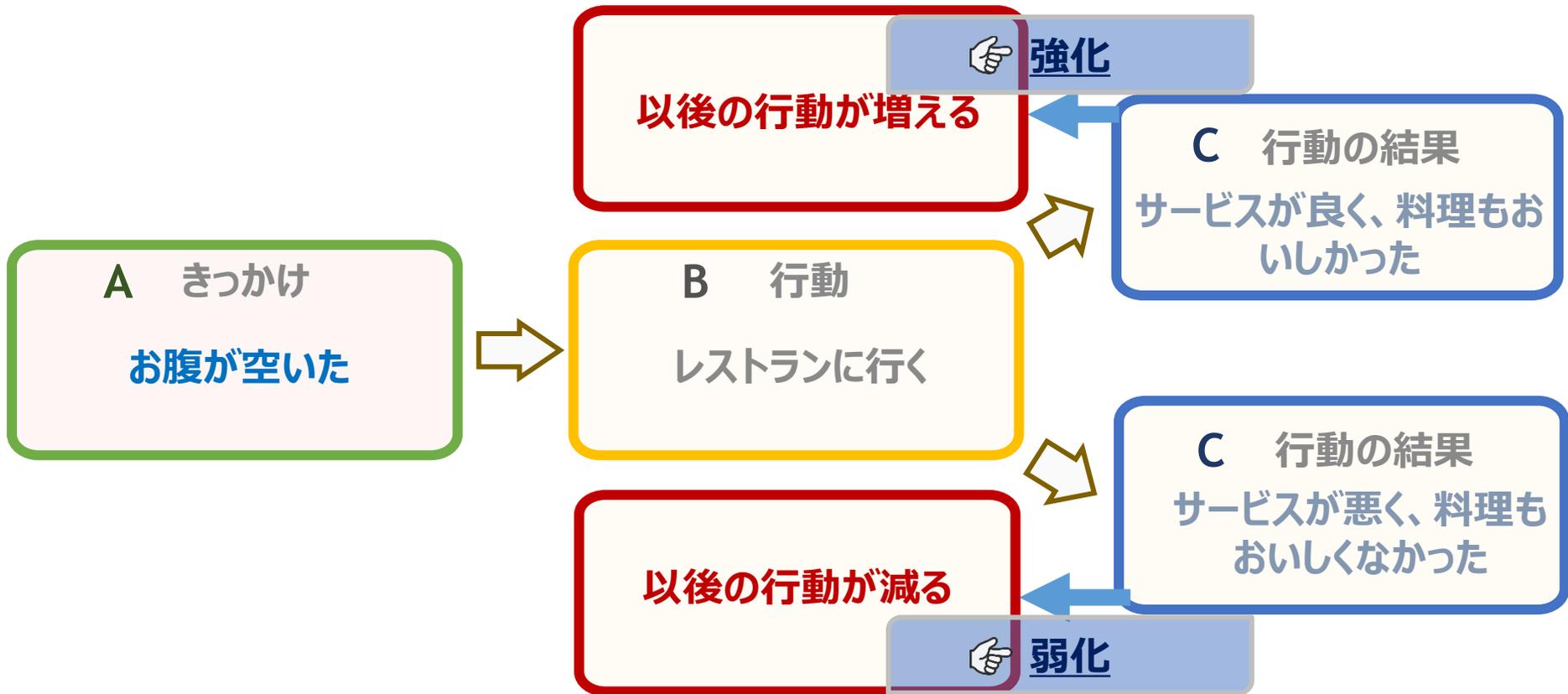
行動
(働きかけ)

結果
(反応・変化)

結果により「行動の増加」や
「行動の減少」が起きる
⇒ 「行動随伴性」

行動の増加と行動の減少（強化と弱化）

👉 行動の法則を理解する



i) 機能から行動の意味を推察する

なぜ、その行動を起こすのか？①

課題となっている行動の裏には、コミュニケーションとしてのメッセージが隠れている

強度行動障害のある方への支援中では、時には課題となる行動に対して戸惑いを感じる 경우가多くあります。私たち支援員からすれば、怪我のリスクもある、「困った人」というイメージを抱きやすい状態です。

しかし、強度行動障害のある方の課題となっている行動には、裏にコミュニケーションとしてのメッセージが隠されていることが多くあります。強度行動障害のある方は、その障害特性とこれまで歩んできた環境と合わさって、本人独特の表現方法（課題となっている行動）に頼らざるを得ない状況にいます。そういった視点で見れば、実は「困っている人」だということが見えてきます。

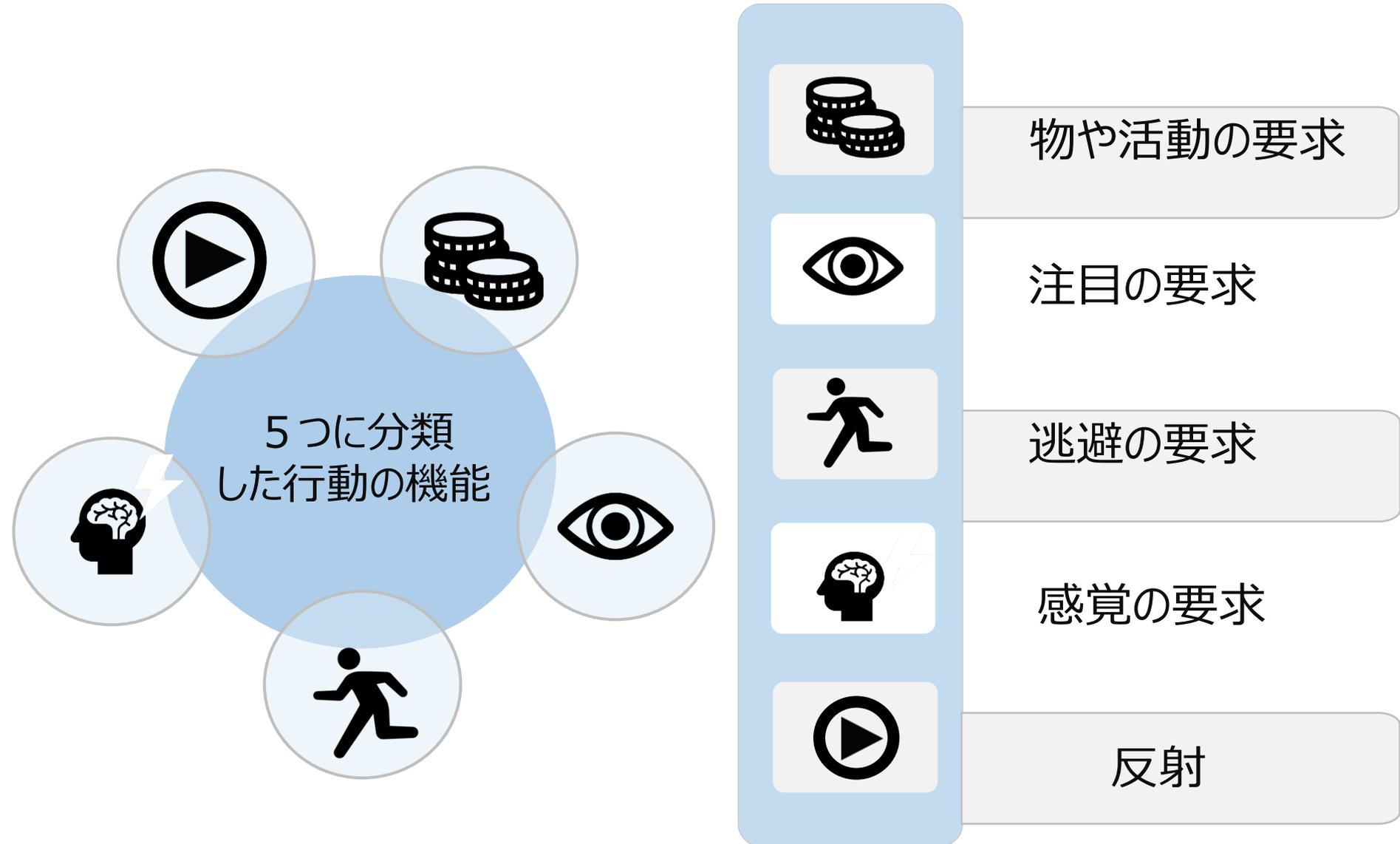
なぜ、その行動を起こすのか？ ②

課題となる行動には5つの機能があり、5つのどれかによって強化されている

応用行動分析学では、行動には5つの機能があるとしています。強度行動障害のある方は、それぞれの表現方法により、5つの機能を人に伝えようとしています。

- (1)物や活動の要求（欲しい物を手に入れる）
- (2)注目の要求（自分に人の視線を集める）
- (3)逃避の要求（NOという意思表示）
- (4)感覚刺激の要求（その行動自体が、本人にとって、心地よい刺激となっている）
- (5)反射の機能（特定の刺激で起きる行動）

5つに分類した行動の機能





物や活動の要求

物や活動の要求の機能

(Case 1) 三子さんはお菓子が大好きです。ある日、父がスーパーマーケットに買い物に連れて行き、「昨日お菓子を買ったから、今日は買わないよ。」と言ったとたん、店中に聞こえるくらい大声で泣き、床に寝そべて手足をバタバタさせ暴れ出しました。他のお客さんの迷惑になると思い、「1つだけね。」というと、すぐに泣き止みお菓子を手に取りました。

A きっかけ



父と買い物中、
お菓子は買わないといわれる

B 行動



子どもが大声でわめきちらす

C 行動の結果



お菓子を買ってもらえる

👁️ 注目の要求

注意獲得の機能

(Case 2) 次郎くんは、お母さんが食事の準備を始めると、大きな音がするほど自分の頭を叩く自傷行動をしてしまいます。お母さんは、大きな音と奇声に驚き駆け寄って、次郎くんに声を掛けます。次郎くんは声を掛けられ関わってもらえると、自傷行動をやめることができますが、お母さんがいなくなるとまた始めてしまいます。

A きっかけ



母が食事の準備をしている
(母の注目なし)

B 行動



子どもが頭を強く叩く

C 行動の結果



母が駆け寄ってきて
話しかける
(母の注目あり)

人 逃避の要求

回避・逃避の機能

(Case 3) 四郎くんは注射が大嫌いです。医師が注射を取り出すと、奇声をあげ、暴れ始めます。職員数名で手足を抑えても、暴れ続け、注射が出来る状況ではない為、延期となりました。

A きっかけ



医師が注射を取り出す
(嫌な活動あり)

B 行動



子どもが大声で
わめき暴れる

C 行動の結果



注射が中止になる
(嫌な活動なし)



感覚刺激の要求

自己刺激の機能

(Case 4) 太郎くんは、することがないときや長時間一人でいるときに自分の髪の毛を抜く自傷行為をし続けてしまいます。しかし、本人の好きなテレビを見ている時やおやつを食べている時は、一人でいても自傷行為をしようとはしません。

A きっかけ



することがない状況
(感覚刺激なし)

B 行動



髪の毛を抜く

C 行動の結果



感覚を得られる
(感覚刺激あり)

▶ 反射

反射の機能

(Case 5) やすおくんは、ある日町の郵便ポストの前で偶然バナナの皮を踏み転んでしまって以来、ポストの前では必ず転ぶようになってしまいました。しかし、他の場所では、そのような行動（わざと転ぶように見える）は見られません。

A きっかけ



偶然のできごと



B 行動



特定のきっかけで
同じ行動を再生

C 行動の結果

周囲の人の反応に
よって他の機能に
変化することがあります

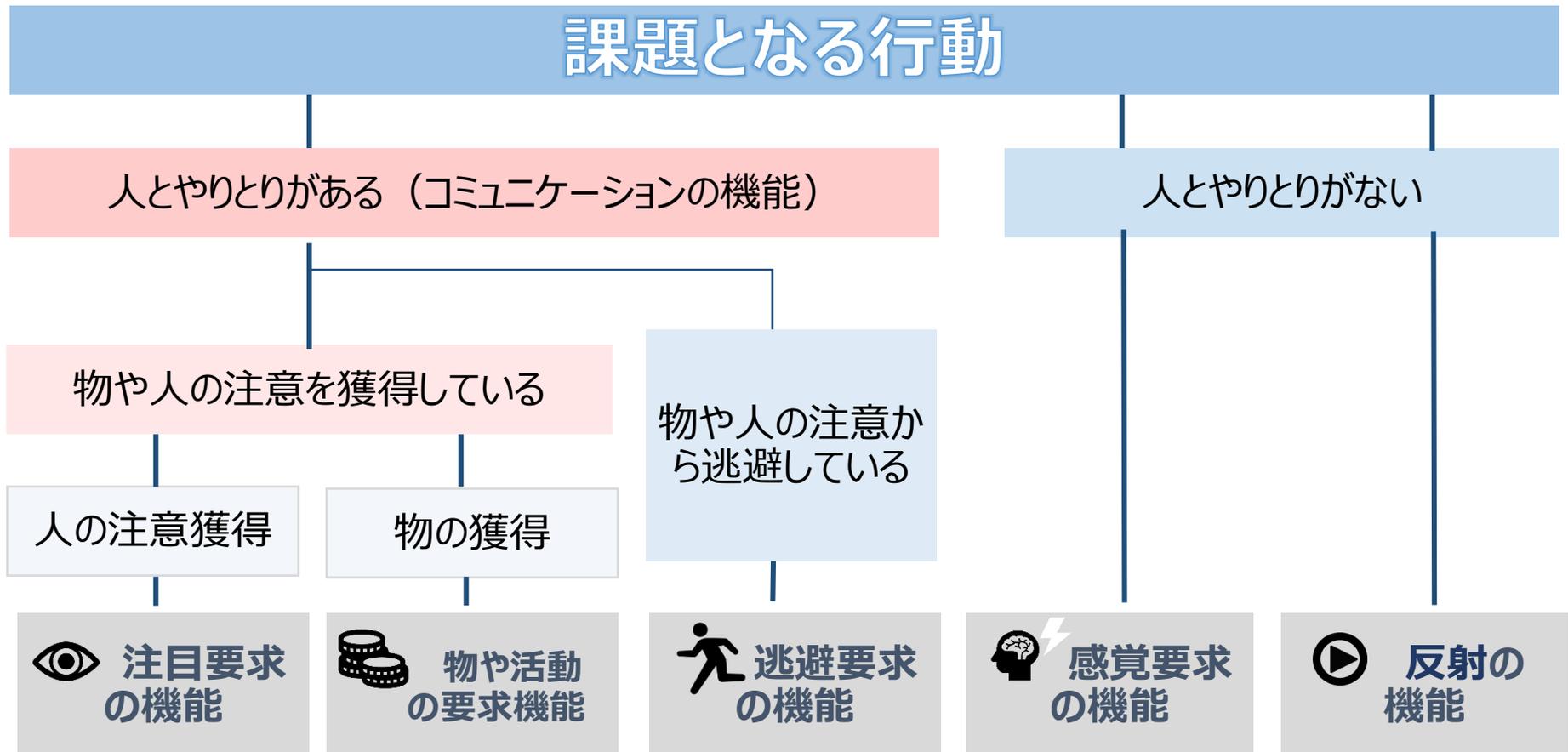
なぜ、その行動を起こすのか？ ③

行動の機能を見ることで、声なき声に気づき、支援に繋げることができる

行動の機能を見る視点を入れることで、課題となる行動を持つ人たちの「声なき声」に気づき、彼らが何を伝えたいのかを、冷静に見ることができます。困りごとを理解し、支援に繋げることができるのです。

行動の機能を推定して支援計画に結びつける

行動問題の機能を推定するフローチャート



強度行動障害への支援の基本は、冰山モデルなどを活用し、本人の障害特性に配慮した予防的な支援を組み立てることです。

基本の予防的支援ではなかなか支援が効果を上がらない場合、冰山モデルでは不適切な環境因子が特定できにくい場合や関係している特性の特定ができにくい場合では、機能分析を使って支援を組み立てる方法があります。

ここからは、行動が起きている「状況」と「結果」に注目する

「ストラテジーシート」

をご紹介します。

ii) 行動の機能から支援を組み立てる

強度行動障害に対応する支援を組み立てる手順の例

1. ターゲットとする行動の決定
2. 行動に名前をつける
3. 行動を記録する
4. 行動の機能を推定する
5. ストラテジーシートの作成

手順 1. ターゲットとする 行動の決定

課題となっていてアプローチしたい行動を
決めます。

複数の行動ではなく、ひとつの行動に絞っ
てアプローチすることが大切です。

手順2. 行動に名前をつける

行動を具体化し名前を付けることで、

- 課題となる行動が明確になります。
- 課題を共有・共通理解しやすくなります。
- 一貫した対応がしやすくなります。
- 記録がしやすくなります。
- 対応の効果（増減）がわかりやすくなります。

手順3. 行動を記録する

強度行動障害への支援を組み立てるうえでは、「行動の具体的な記録を取る」ことが有効です。

行動の具体的な記録を取ることで、

- ・ 起こる場面が予測可能になる
- ・ 行動の機能が推定できる
- ・ 起きていない場面に潜む良い条件に気づく
- ・ 対応の準備がしやすくなる
- ・ 指導やアプローチの成果がわかる

ここでは「行動記録用紙」を使用します。

「行動記録用紙」

行動記録用紙

氏名：

ターゲットとした行動 (B)：

日付	先行事象 (A)	誰に・何に	何をした (B)	結果事象 (C)	対応後の本人の様子・その他の気づき	記録者
	②		①	③		

行動記録用紙は記録の数が多いほど良いですが、ある程度標準的な流れが見えてきたら記録を中止して、記録した行動の分析を行います。